

国際交流事後活動ニュース

MACROCOSM



Contents

国際青年育成交流事業	2
青少年国際理解セミナー講演録(2)	4
ターニングポイント	9
第17回「世界青年の船」事業帰国報告会	12
Ship-mates育成プロジェクト	13
国連世界食糧計画スリランカでの活動	14
スペシャルオリンピックス	16
日本青年国際交流機構都道府県役員研修	17
中国同窓会主催「中国語講座」	19

マクロコズム
2005.9 vol.66

(財)青少年国際交流推進センター

国際青年交流会議2005



外国青年と懇談される皇太子殿下

「国際青年交流会議」は、皇太子同妃両殿下の御成婚を記念して、平成6年度より始められた「国際青年育成交流」事業の一環として開催されるプログラムで、同事業に参加する日本派遣青年と外国招へい青年など約400名が一堂に会し、7月8日に開催されました。開会式の後、前軍縮会議日本政府代表部特命全権大使であり上智大学法学部教授の猪口邦子氏による「21世紀市民社会における国際交流」と題する基調講演、その後、基調講演のテーマに基づくグループ討論が行われました。夜には皇太子殿下の行啓を賜り、レセプションが催されました。

招へい青年は、表敬訪問、都内視察、課題別視察などの「東京プログラム」、日本青年とのディスカッションを通じて国際理解を深める「討議セッション」、4府県（滋賀県、京都府、大阪府、鳥取県）に分かれて、ホームステイなどを行う「地方プログラム」に参加し、7月6日からの21日間に及ぶプログラムを終了し、7月26日に帰国しました。

レセプション

ミャンマー青年と懇談する日本青年

外国招へい青年を代表して挨拶するドミニカ共和国のナショナル・リーダー

レセプションで和やかに懇談する青年たち



基調講演

「21世紀市民社会における国際交流」



上智大学法学部教授の
猪口邦子氏



基調講演の
様子



熱心に講演を聴く参加青年



鋭い質問を投げかける参加青年



活発な討議を行う参加青年



和やかな雰囲気での討議を楽しむ参加青年

(vol.65からの続きです)

国際社会における 日本の役割について

上智大学法学部教授
前軍縮会議日本政府代表部特命全権大使
猪口邦子氏

～9.11後の世界～

9.11後の世界は、小型武器の非合法拡散がすすみ、テロリストの手に渡り、その集積によって彼らの権力基盤が築かれ、巨大な権力のシステムを構築できた時代であり、これがアルカイダの姿なのです。9.11のテロは小型武器で行われたのではなく、果物ナイフで乗客と乗務員を脅し行われたわけですが、一つの犯罪ではなく大規模なテロとなったのは、アルカイダがあるからです。アルカイダは、小型武器の非合法拡散の結果なのです。

世界に流通している小型武器の8割が非合法のものと考えられますので、毎年亡くなる50万人のほとんどが、非合法の小型武器の犠牲者です。小型武器は国防や治安のためにも一部保持しなければならないので、対地雷のように完全廃棄できないのですが、非合法の部分を完全軍縮するというのが冷戦後の今日、テロと戦う時の大きな課題です。

それから、大量破壊兵器である核兵器はこれ以上絶対に生産しないことが課題です。量が増えれば、非合法の手に陥っていく可能性は高く、管理が難しくなっていく。核兵器の場合は核テロとなりますので、それをどう防ぐかは今日の大きな課題です。ですから、9.11後の世界の根本的な課題は、兵器の非合法拡散と人々を和解に導くことの2つと言えます。では、和解のプロセスを立ち上げるためにはどうしたらよいか。和解とはどうすれば可能になるのか。

例えば、日本は国連安全保障理事会の常任理事国になったとしたら、何をするかという考えをあまり表明してこなかったのですが、私としては明快な考えを持っています。それは、日本が常任理事国になれば安保理のさまざまな決議に軍縮不拡散の条項が必ず入り、また、和平協定の決議などには単

にある決着を示すのではなくて、和解のプロセスを社会各層に浸透させることを示す和解のプロセスの条項が入るということです。

日本が主張して軍縮不拡散の条項を入れれば、日本は広島・長崎の国だから、世界は聞かざるを得ない。国際社会には、ある程度その人が正当性を持って主張できる分野があるわけで、日本はこの分野を推進する責任を果たすと言えば、常任理事国としての重要な働きをする日本のイメージが伝わりやすいと思います。また、今日の紛争を再発のない形で終結させるには和平協定のみでなく社会的な和解のプロセスが重要であり、日本は、安保理の決議案には和解条項を含めるよう努力すると主張する。ルワンダにしてもコンゴにしてもイラクにしても、人を和解に導かなければなりません。

先日、私の研究室に高校生が来て、これに答えられないなら国際政治の教授ではないというくらいの勢いで「1つだけ教えて下さい。戦争はなぜ繰り返されるのですか」と言いました。私は「和平協定はあっても和解のプロセスが構築されていないから。和解のプロセスに何が必要かを考えぬいていないから」と答えました。

～軍縮不拡散～

和解のプロセスには何が必要ですか。私の観点から見れば、話し合いの妨げになるような非合法の武器を完全軍縮しなければならない。ここで、非合法拡散する小型武器の軍縮が国連のプロセスとして最も必要だという流れがでてくるわけです。ですから、和解のためにはまず軍縮不拡散が不可欠ですね。そのほかいろいろな要素があると思うのですが、世界の数少ない成功事例を研究してみると、南アフリカの黒人と白人の和解があります。彼らは融合政府を作りましたが、そのときに「真実和解委員会」を設置しました。黒人と白人が真実和解委員会(Truth and Reconciliation Commission)を立ち上げたのです。そこでお互いに事実を見つめていくということなのですが、1つの大きな答えがこの名称にあります。和解に必要なのは謝罪の前に、真実を見つめるということなのです。真実を見つめないで謝罪しても、魂からの声にならないかもしれない。真実を見つめれば、魂の底から詫

びの言葉がでてくる。どちらが先かといえば、真実を見つめること。世界で数少ない和解の成功事例が物語るものです。

これを今日の紛争地帯でやっていこうという動きも出てきています。国連ではTRC-like methodといひまして、準真実和解委員会方式という考え方が今取り入れ始められているところです。大きな話にはまだなっていないけれど、事務総長レベルでは受けとめてもらっている、これから政策化されていく可能性があるのです。世界はまだそんな段階にあるのです。

この他、和解の要素としては、さまざまなものがあるかもしれません。例えば、長く戦争をしていると経済的にも疲弊しているから、復興支援を約束すれば、和解する人たちがいるかもしれないですね。また、国際会議などを開催して日の当たる場所を確保してあげると「やはり世界は見ているから、いい加減なことはできない」と思って銃を捨ててくれる人がいるかもしれない。

何が人を和解への一步を踏み出すようにさせるかは、場合によって違いますので、多様な政治的な資源が必要だと思います。今の国連の安保理では、常任理事国が非常に画一的な基準で選ばれていますから、多様な資源がないわけです。ですから、もう少し常任理事国の中に多様性を持ち込めば、この場合はこれが効くというようないくつかの対応ができますから、和解を導きだす能力が増していくと思います。

9.11以降、あるいはポスト冷戦以降の世界の戦争の特徴を見ますと、和解に失敗して戦争を繰り返してしまっています。世界で戦争を防いでいく、あるいは起った戦争を早期に終結させていく責任のある機関が国連の安全保障理事会です。ですから、今のままでは、機能が不十分ではないかと思ひます。ただ、和解については方法がまだはっきりわかっていない。しかし、成功事例から学ぶことはあるわけで、真実を共有す

ることなくして、どのような共通の未来もないと言えます。

テロとの戦いは、領土を持っている国家対領土を持たないグループという構図です。国民を持つ国家と持たないグループとも言えます。近代の軍隊は基本的には領土的な平定をするためにできているので、領土がない人を攻撃するのは非常に不得意なわけですね。戦争のやり方がわからないから、結果的にはそこに住んでいるアルカイダとは全く無縁の人たちまでもが亡くなってしまふような攻撃の仕方になる。付帯被害というのはそういうことです。こうした矛盾をずっと繰り返しているから、基本的には戦争という手法によってテロを解決するのは、とても難しいのだと思ひます。現代の国際社会には戦争と平和のさまざまな問題があるのだけれど、そこにはポスト冷戦期の構築がないまま、2001年9.11の突然の恐怖感の中で対応しようとしたことによる混乱があるのかもしれない。

今後の方向性としては、軍縮の手法が根本的には一番正しいのではないかと思ひます。私はその職務にあったからというわけではなく、全体の流れを見てそう思ふのです。テロをなくすには、テロリストにそのような兵器が渡りにくいようにするのが遠回りのようで最も確実な方法ですね。確率的に小さくしていくことしかできないから、テロが完全になくなる世界を展望することはできないのだけれど、アルカイダのような組織的な権力構造の蔓延をストップさせることはできるだろうと思ひます。そのために、通常兵器と大量破壊兵器の軍縮不拡散を徹底していくことが必要だと考えます。

問題認識の重要性～認識形成者たれ～

軍縮大使として私がしたことは、ほんの小さなことなのですが、この流れをわかってもらうためには、かなりの努力をしたと思ひます。小型武器の話の先にしますと、これは国防や治安にも必要ですが、非合法なる部分は完全軍縮しなければならない。まず回収破壊事業という刀狩のようなことを徹底させる。そのためには、各政府が行政措置や立法措置をとる必要がありますので、そうした課題があるとの認識を持ってもらう必要があります。

ところが、世界にはそのような認識がまだ希薄で、この問



『小型武器よさらば / 戦いにかり出される児童兵士たち』
猪口教授が解説等を担当された
小型武器軍縮についての初の児童用書籍

題がmainstreamなものとして認識されていないという困難に直面しました。

そのとき初めて、ほかの分野でその問題を認識した最初の世代の人々の群像がどれほどの苦勞をしたのかということに想いを馳せました。例えば、3、40年前、環境問題を言い出した人は、周りの人から「面倒なことを言い出した」「余計な話だ」「もっと世の中には重要なことがある」と言われたことでしょう。

「重要問題である」というagenda settingをすることが、いかに難しいか。世界には無数の問題がありますが、その中で優先的に取り扱わなければならない問題の中核的認識形成者になれるかということです。皆さんの一人一人が、そういう市民になれるかということ。「何が人間社会にとって大事か」という認識形成をすることが一番難しいのです。

今は環境問題について、「重要だとわかっているけれどついつい惰性でできない」という人はいるけれど、「重要じゃない」という人はめったにいないですから、もう認識形成には成功しているわけです。でも、初期にこれを認識形成しなければならなかった人は、あらゆる困難と闘ったと思います。

私が最も苦勞したのは、小型武器で1年に50万人が亡くなっていて、この問題に取り組まなければ被害は拡大し続けるということ、なぜ世界はわからないのだろうかということでした。

でも、偉い人の中にも一般のNGOの中にもわかってくれる人はいるのです。偉い人といえば、コフィ・アナンさんが最初の理解者でした。私は「国連で小型武器軍縮実施のための政府間会議プロセスを構築していきたい。自分が第1回会議の議長になってプロセスを立ち上げていきたい。国連会議をすることで、国連が中核的認識形成者になれます。核軍縮も大事だが、小型武器軍縮も大事だということを、皆がわかるようになるはずだからサポートしていただきたい」と申しました。アナンさんは「とにかく全面的に支援したい」とおっしゃってください、その会議が2003年の7月に開催されたのです。

国連加盟国全体を対象とする軍縮不拡散分野の初めての日本人議長として会議を行いました、最後に議長総括を

書き、添付した報告書が全会一致で採択されました。

会議そのものよりも、そのlead up processの方が重要です。lead upというのは日本語に翻訳が不可能なのですが、敢えて訳すと「準備期間」となります。しかし、こう訳してしまうと、突然その本当の政治的ニュアンスが消えてしまう。Lead upというのは、もっとハイ・テンションな意味があり、認識形成をするプロセスなのです。

このlead upを成功させるために、早く議長を選出してもらわなければならず、なおかつ議長職を取りたいと思っていたのですが、多くの方の理解を得て加盟国全体の全会一致で早い時期に議長内定者になりました。各国がそれを国内実施にもっていくという流れを作っていました。

認識形成における言葉の重要性～概念化～

アナンさんは、その過程において、小型武器問題の重要性をひとつの言葉で言い表してくれたのです。

表現というのは、認識形成を最も促進する重要な部分だから、言葉は大事にしなければいけません。言葉にすることは、概念化に挑むということなのですね。ですから、皆さんも教育を受けていく過程で、抽象概念を操作できる人になることを考えてもらいたいと思います。

“De facto weapons of mass destruction”と彼は言いました。つまり、小型武器は事実上の大量破壊兵器だ。だから世界は注目しなければならない。

彼がこのように言うことで、「それは重要なことだ」と世界は認識し始めました。こうした決定的な認識力を持つ言葉をsound biteと言うのですが、皆さんの心に「噛み付いてくる音」というわけです。“De facto WMD”と聞けば、世界はこれが事実上の大量破壊兵器だと概念化することができます。こうしたsound biteを発する能力は世界をリードしていくとき大きな力になると思います。

日本では、なかなか抽象的に物事を考えるという教育が十分ではないと思いますが、これは養わなければならない能力です。そもそも人は、具象の世界から抜け出ることが難しく、自分が具体的に経験した以外のことを考えられないのです。ですから私たちは皆、非常に貧しい能力しか持っていない。



アナン事務総長と(2003年)

国連の会議やジュネーブ軍縮会議の議場に立ったとき、世界の粋を集めたとされる外交官がごったがえす議場で、なんと人間の能力は乏しいことか、自分が具体的に経験していないことはなかなか実感できないから、こんなにもゆっくりしか対策が進まないのだと思うのです。

被害者の声から、想像する力を得る

では、どうすれば具体的な経験を超えて、人はimagineする能力を持つことができるか。imagineする能力がないから人間社会は貧困なのです。経験していないことをimagineできますか。今この場のように、誰かが話をすれば一瞬imagineができるでしょうが、だいたいすぐ忘れてしまうでしょう。

議長としていかに説得しようとしても効果は薄いと思いました。考えた結果、ある決定的に成功した戦略にたどり着いたのです。それは、自分の乏しい能力を突破する方法、つまり、経験していないことをimagineする力を不可逆的に身につけるのを可能にしてくれる人を探したのです。それは、被害者だったのです。

被害者の声を聞いたら、人は不可逆的にimagineする力を得て、行動する人になっていきます。それをまず対人地雷から始め、次に小型武器について行う。そして私の最終的な戦略、私の本当の目的は、広島、長崎の国である日本が世界で核軍縮を進めるということでした。

「次の核軍縮条約を推進したいので、私の言うことを聞いてください」と発言したときに世界が敬意をもって私の話を聞いてくれるためには、どうすべきかを考えました。長期戦略で最終到達点までのことを考えました。「広島、長崎では、こういうことがあったのです。次の核軍縮条約が重要なのです。日本の立場をわかってください」と訴えても、一部の人が「がんばってやっているね」という目で見てくれるけれど、十分な支持を得るのはなかなかむずかしいのです。私が着任したのは、9.11から半年後ですから、世界は不信感に満ち、多国間外交は不可能といわれた時代でした。

そういう時に、私が発言したら世界がきちんと聞くという状態を作るにはどうしたらいいかということを考え、そこに至るための戦略を構築しました。まず、核兵器だけでなく、すべての武器の被害者と連帯しようと考えました。自分のissueだけでやっても、人は聞いてくれないですから、より普遍的な広いバスケットを作っていこうということです。そして、身近なわかりやすいテーマにもつなげていこうと思いました。

Raise the voice

対人地雷の分野では、被害者がある程度声を上げることが可能になっていましたが、それはNGOの大きな努力によるものでした。ですが、一般的に被害者は、もはや声を上げるだけの余力がないことが多い。特に武器による被害者は、暮らしていく、生きていくだけで手一杯で、「あなたの声で世界が変わるから議場にきて話してください」と呼びかけても、「何を言っているんだ、世界は私に何をしてくれたか」「国連は何を助けてくれたか」と言われるのが関の山です。そうした意味で、被害者の声を議場に届けることはほとんど不可能だったのですが、対人地雷の分野ではNGOが育っていて、これが可能だった。

raise the voiceというキャンペーンが効果的でした。raise the voiceとは、被害者は声を上げる。自分のためというより、想像力の乏しい他の人々が、永久にその能力の乏しさの壁を突破できるようになるために、被害者の声を聞く。聞くことで、彼らは初めて、地雷の除去の課題がどれほど重要かということがわかる。こうして、被害者はまずオタワ条約体制の議場に登場してくれるようになったのです。

次に、このraise the voiceというキャンペーンを小型武器で行いました。小型武器の非合法拡散を防ぐという分野はまだ組織化のレベルが低く、とても大変だったのですが、私は国連の政府間会議の議長を司る傍らNGOのアンブレラ組織を作ったのです。アンブレラ組織というのは、その中にたくさんの実施NGOがぶら下がる全体組織のことをいいます。アンブレラ組織IANSA(International Action Network on Small Arms)という小型武器のNGOの成長をサポートしました。そうすると実施NGOも育ってきて、2003年、私の議長下で国連会議が開催されるころには600ものNGOが世界で育ち、raise the voiceの担い手になってくれました。

こうして被害者の声が議場に届くときには、議場は敬意を持って接しなければならないのです。被害者をサバイバーと呼びますが、特別の苦勞をのりこえたサバイバーたちは尊い存在です。議場はその人の努力を敬意を持って受け止めなければならないという流れを作るわけですね。ですから私は対人地雷の条約体制の常設委員会の議長も小型武器の国連会議の議長もしましたから、被害者をどう認識するかという認識形成において影響力を発揮することに取り組み、これで、まずテンプレートのような基盤ができてきました。

そこで、核兵器の被害国からの大使である私の言うこともきいて下さい、という流れにつなげていくのです。私は原爆を知らない世代なのですが、日本を代表している私が被害者の声です。だから私が発言する時は皆敬意と共感をもって聞いて下さい、という流れを作っていきます。日本は唯一の被害者だから、という流れになるわけです。

日本の主張を世界に届ける

次代の核軍縮条約はカットオフ条約という核兵器を完全に生産禁止する条約です。その条約の交渉枠組み案を作成していきました。これだって大変なのです。英語で書くのですから。軍縮代表部は私の他に外交官が6人いる代表部なのですが、この小規模公館でそれだけの仕事をするのです。若い外交官たちが本当に頑張ってくれました。今や軍縮会議に公式文書として付託されていますが、日本案として出てきているものです。今後交渉に付されるべきその条約名はFMCTといい、その流れを作ったのは日本です。

被害者の話をまとめますと、日本国内では被害者が声を上げるという流れがあるのですが、国際的には様々な事情で十分に発信されてきませんでした。でも、今、対人地雷と小型兵器で人道的な観点から被害者が声を上げるのは励まされるべきことであり、何ら遠慮したりすべきことではないので、心配する必要がなく、政治的なオフェンスと見られる等の心配をする必要もないことであり、なおかつ世界は皆これを敬意を持って聞かなければならないという流れを作ったと思います。私だけではないけれども、そうした認識形成にかなり強く動きかける努力はしたのです。そしてみんなでそういう流れを作ったのです。

今年是被爆60周年ですが、初めて国連で原爆展が実現します。まさに被害者が声を上げるraise the voiceを、日本が世界に対して行う流れです。やはり遠回りのように見えても物事を普遍化していくのは勝利の戦略です。対人地雷の被害者に議場は敬意を持って接するといった流れを核軍縮の分野にも繋げていったのです。

日本の主張を世界に届けるには、このようにより普遍的な視座の中で、日本にとっての優先課題の位置付けができることが重要です。自分が抱えるアジェンダを大きな流れの中に位置付けて見ることができるようになると自らの目的や課題もまた達成しやすくなると思います。

(講演要旨からの一部抜粋)

小谷みどりさん 第18回「東南アジア青年の船」事業 参加青年



小谷さんは第18回「東南アジア青年の船」事業に参加、現在は、第一生命経済研究所主任研究員として、葬送問題、余暇論、生活設計論などを研究しています。「お葬式のお値段」、「こんな風に逝きたい」など興味深い著書も多く、新聞やテレビでも発言されています。それまでアジアに関心がなかった小谷さんが「東南アジア青年の船」事業に参加されたきっかけ、この事業がその後の人生に与えた影響などについてお話をうかがいました。

—「東南アジア青年の船」事業に参加されたきっかけは何ですか。

親の仕事の関係で、子どもの頃から自宅には欧米人が出入りし、家族でよく海外旅行もしました。でも、両親は東南アジアには興味がなかったのも、私も関心を持っていませんでした。

ある日、母がNHKの語学テキストに「東南アジア青年の船」の広告が出ているのを見つけ、私に行ってみたらどうかと言

いました。当時、フィリピンの治安が不安定で、危なくて旅行できるような国ではないと思っていましたが、政府の事業なら安心だから行ってみたらと、親に勧められて応募したのです。

大ショックだった最初の寄港地

最初の寄港地がフィリピンだったので、上陸前に船から見たマニラの光景には大ショックでした。高層ビルがたくさん見えたのです。テレビで見ていたフィリピンは、ゴミの山とか貧困とか負の部分ばかりが強調されていましたから。それまで発展途上国に行ったことがなかったので、東京と変わらない都会が存在するなんて、恥ずかしながら想像もしていませんでした。

今まで私が信じていたものは何だったのだろうと、自分の中で何かがガラガラと崩れていく感じがしました。

—寄港地活動でもショックを受けましたか。

フィリピンのホストファミリーの家で2回目のショックを受けました。トイレを借りたら、水洗トイレなのに水が流れないのです。水が流れません!と中から叫んだら、そばに置いてある桶の水を流せと言われ、びっくりしました。そんなトイレ、初めて見ました。

私のホストファミリーは、パパは新聞社のカメラマン、ママは自宅で幼稚園を運営していて、貧しい家庭ではありませんでした。でも、その地域ではしょっちゅう停電があり、水がなくて、パパが毎朝公共の井戸に水を汲みに行っていました。食器も身体も同じ場所で洗うのです。大きなゴキブリがいっぱいいるし、その水で顔を洗ったら「ものもらい」になってしまいました。

3つ目のショックは、日本では客人をもてなすのに、ホームステイ先でお客様扱いされなかったことです。こんなことを言うとは失礼ですけど、夜は子どもたちと雑魚寝、出される食事も簡単な普通のご飯だったのです。量やおかずの数が増えるわけでもなく、みんなの食べる分が少なくなるだけ。なのに「食べる、食べる」と勧めてくれるのです。家族の一員になったようで、ファミリーの温かさや優しさに感動しました。

その後、このお宅には何度も泊まりに行きましたし、一緒に旅行もしました。フィリピンに限らず、ほかの国のホストファミリーとも今でも親しいお付き合いをしています。

お風呂場でコイが泳いでいた

インドネシアでは、私のホストファミリーは迎えに現れませんでした。管理部に、船内で宿泊しましょうと言われ、あきらめかけていたとき、私を拾ってくれたファミリーがいたのです。ブルネイの女性参加青年を一人受け入れることになっていたのですが、ぼつんと取り残されていた私を「ついでだから」と、連れて帰ってくれました。ところが、その一家はインドネシア語しか話せませんでした。Helloも通じない。ブルネイの参加青年はインドネシア語が話せるので、みんなで盛り上がるのだけれど、私は彼女の通訳なしでは何も分からない状態でした。

お金持ちの立派な家だったのですが、お風呂場が薄暗くてよく見えない。水浴びをしようと浴槽をのぞくと、コイが泳いでいました。こんな水を浴びて、また病気になるたらどうしようと思いましたが、途中から「エイヤ!」と、細かいことはどうでもよくなりました。いろんなカルチャーショックがありましたが、楽しかったですね。このホストファミリーは私を拾ってくれた恩人です。パパもママも亡くなりましたが、今でも感謝しています。

—船内で印象的だった活動はありますか。

ディスカッションのテーマが「環境」や「アセアンの協調」など難しそうなものばかり。何とかなりそうだったのがcourtship「男女関係」でしたので、そのグループに入ってみたら、日本人女性は私だけでした。

その頃、日本人男性のフィリピンなどへの買春ツアーが社会問題になっていたの、「日本人の男性は女性を蔑視している」「日本人はそもそも貞操観念がない」などと、他の国のメンバーから一斉攻撃を受けました。私は日本女性の代表のように扱われて戸惑ってしまいました。それまで討論をする機会が日本語でもほとんどなかったので、さまざまな考えの人たちの前で自分の意見を述べたり、一般論を話したりすることの難しさを実感しました。

ムスリムにサラミを食べさせてしまった

日本へ帰る途中、大きな台風に遭遇し、立ってられないくらい船が揺れるというハプニングがありました。その頃、ブルネイ参加青年たちと仲良くなった私は、いつも一緒に行動していました。ひどい船酔いにやられ、食堂に行けない彼らのために、私は豚肉が入っていない料理を選び、運んであげたのです。サラミがのったピザだったので、私はサラミが豚肉だと知りませんでした。

それを口にするとたん、青年の顔色が変わり、トイレで吐き出したあと、お祈りする姿をみて、ほんとうに悪いことをしたなと思いました。でも、豚肉を食べたことがないはずなのに、どうして一口食べて、それが豚肉だとわかったのか、今でも不思議です。

—「東南アジア青年の船」での経験は進路を決めるきっかけになりましたか。

私には「何になりたい」という具体的な思いがありませんでした。就職活動も



マレーシアのホストファミリー

せず、なんとなく大学院に進学し、なんとなく「東南アジア青年の船」に参加したくらいです。

でも「東南アジア青年の船」に参加して、「私たちは同じアジア人だ」ということを強く感じました。欧米人は、私にとっては外国人、異文化ですが、東南アジアの人たちは兄弟、親類のようで、考え方や感覚が似ている気がしたのです。東南アジアといってもそれぞれの国で文化や宗教は異なりますが、その根底にある何かに、同じにおいを感じたのです。

アジアから学べること

私は、ホスピスや死の迎え方、高齢者の生きがいなどを研究テーマにしていますが、日本の学者は欧米を向いている人がとても多い。でも私は、アジアの国々にこそ、学ぶことがたくさんあると思っています。

2000年に1年間会社を退職し、シンガポールのホスピスでボランティアをしながら、ホスピスの理念や福祉を学びました。タイのエイズホスピスにも行きました。タイのエイズホスピスは衛生的ではなく、薬もろくにありません。毎日10人以上が亡くなり、さながら野戦病院のようでした。でも、瀕死の患者さんが私にほほえみかけ、安らかな顔をして亡く



マレーシアのホストファミリーの次女の結婚式

なっていきます。私たちは、アジア人の死生観から学ぶことがあると思いました。

—設備が整っていないのに、なぜ、安らかに死んでいけるのでしょうか。

「一人じゃない」という安心感でしょうか。タイのエイズホスピスには、家族に見捨てられた患者が少なくありません。エイズに対する社会の偏見で、夜の間にホスピスの玄関前にごみのように捨てられていくのです。でもホスピスで過ごすうちに、彼らの表情が変わっていきます。僧侶やボランティアの献身的な活動に触れ、「自分は一人でない」とか「必要とされている」と感じた

とき、他の患者の世話をし、勉強したいとか、エイズ予防の重要性を社会に伝えたいという使命感を持ち、前向きに生きる気力が湧いてくるのです。

幸せな死に方

「ガン」といえば、痛みを苦しんで瘦せて死んでいく怖い病気というイメージがあったのですが、シンガポールには、やせ衰えたガン患者はほとんどいませんでした。ボランティアに通っていた施設で、「また来週ね」と別れたら、翌週には亡くなっていた患者さんもいました。死が近い人たちにはとても見えないのです。

日本と違い、最期まで家で暮らす末期ガンの患者はたくさんいます。ホスピスの力ってすごいなあと思いました。痛みがなく、生きる気力があれば、瘦せることもなく、こんな幸せな最期はないと思いました。身近なアジアの国で、こうやって幸せな死に方をしている人たちがいるのです。

助けてもらうことに負い目を感じない

シンガポールでは「カルマ」と呼んでいますが、自分が誰かを助けてあげれば、自分が困ったときに誰かに助けてもらえるというように、広い意味でのギブアンドテイクの精神が見られます。自分が助けた人に助けられるという直接的な形ではなく、死んでから自分の善行が報われるのを期待するわけでもなく、生きている間の助け合いの輪によって社会がうまく循環しています。日本も昔はそうだったのでしょね。

だから、「以前、祖母が老人ホームで世話になったから」などと、帰宅前や空いた時間にボランティアにやって来る人の姿も

珍しくありません。シンガポールでは共働きの基本ですが、家にいる末期ガンの夫のため、すべての妻が会社を休んで看護するわけではありません。ホスピスには在宅患者用のデイケアがあるし、地域にボランティアもいるし、気軽に助けてもらえる土壤があるのです。

昔は無口だったけれど

私は何かを学ぼうと思って「東南アジア青年の船」に参加したわけではなかったのですが、気負いや先入観がなかったことで、得たものや感じたものが大きかったのかもしれない。

ある雑誌に「『東南アジア青年の船』に参加して、人生観が180度変わった」とエッセーを書いたところ、上司が「こんなので人生観が180度変わるわけないでしょう!」と言うので、「でも変わったんです!」と言って口論したことがあります。大げさではなく、「東南アジア青年の船」に参加して、私の何かが吹っ切れたのです。

それまで私は極度のあがり症で、人前で発言するのが大の苦手でした。そんな私が、今では生放送や講演で平気でしゃべれるのですから、学生時代の友だちや先生はとても驚いています。街ゆく人の服装だけを見ても、アジアには実にさまざまな人たちがいます。これまでの自分の価値観は井の中の蛙だったことに気づいたとたん、他人の目が気にならなくなり、とても気が楽になりました。

この事業で初めてアジアに行きましたが、アジア人は兄弟だということをつくづく感じました。難しいことを学んだわけではありませんが、アジアの人たちが大好きになりました。毎年、アジア以外にもさまざまな国に調査に出かけますが、世界を知るたび、アジアへの親近感がますます強くなります。

シンガポールでボランティアした時のように長い時間はあまり取れませんが、「東南アジア青年の船」参加後に勉強したインドネシア語が役に立てばと、拘留所や刑務所に収監されているインドネシア人やマレーシア人の手紙を検閲するボランティアをしています。小さなことですが、何か少しでもお返しができたらいいなと思っています。

事業に参加されたばかりの若い方にお伝えしたいのは、「楽しかった」だけで終わらせるのではなく、人と人の縁、なかでも、ホストファミリーとの縁を大事にしてほしいということです。

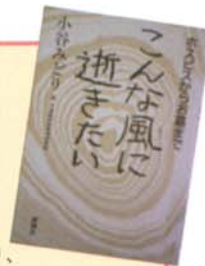
アジアに興味のなかった私が東南アジアを大好きになり、今こうしているのは「東南アジア青年の船」で出会った人たちのおかげです。

～インタビューを終えて～

「主任研究員」という肩書き、葬送関係の数々の著書などから、近寄りたがたい雰囲気の学者さんかもしれないと想像し、ドキドキしながら取材に行きました。でもまったくの杞憂でした。親しみやすいお人柄、まるでドラマのようなお話に笑いがとまりませんでした。たいそう聡明な方で数々の研究をしていらっしゃるのに、「私、勉強して好きじゃないのですよ」とサラッとやってのける姿にさすがさを感じました。

小谷みどりさんの著書

- 「お葬式のお値段」(PHP研究所)
- 「変わるお葬式、消えるお墓」
- 最期まで自分らしく(岩波書店)
- 「おとむらい新世紀」(東京新聞出版局)
- 「こんな風に逝きたい」(講談社)
- 共著に『生活と環境の人間学』(昭和堂)、
- 『情報生活のリテラシー』(朝倉書店)など。



Together Towards Tomorrow (共に明日へ)

第17回「世界青年の船」事業帰国報告会が平成17年6月12日に国連大学にて実施されました。国連大学での実施は、今回が初の試みということもあり準備に苦労することもありましたが、当日は既参加青年のみならず、一般来場者の方も含め大勢の方にお越しいただきました。

2005年1月19日、このスローガンを胸に第17回「世界青年の船」事業は、13か国260人の青年を乗せ43日間の航海にでました。船の上は毎日新しい「何か」の発見でした。そこは人生の縮図であり、小さい地球コミュニティであり、また、私たちの家でした。楽しいことや苦しいこと、それぞれが悩み、怒り、また助け合って生きるという経験は何物にも代えがたいものです。そして、私たちは、この世界には本当に様々な人が生きているということを知り、新しい事を発見する喜び・楽しさを学びました。国籍・言葉・文化・宗教・性別・価値観、それぞれに違いはありました。しかし、そんな違いを理解し、尊重し、時には主張する、思いやる…そんな大切な何かを気付かせてくれた事業であったに違いありません。

これから、この経験を新たな世界に繋げていく…それこそまさに私たちの次の目標になりました。共に明日に向かって、一歩を踏み出してみましょう。

実行委員長 酒田美香 コメント抜粋



船内活動ディスカッションの報告(教育コース)



展示コーナーの様子

日本参加青年が各国の民族衣装を着て参加国の紹介をした

当日のプログラム

日時：平成17年6月12日(日) 13:00-16:30

場所：国連大学ウタントホール

- 13:00-13:10 開会・挨拶
- 13:10-13:20 内閣府青年国際交流事業
第17回「世界青年の船」事業概要説明会
- 13:20-13:25 参加国紹介
- 13:25-14:10 コース・ディスカッションの説明・紹介
- 14:10-14:30 寄港地活動説明・紹介
- 14:30-14:40 クラブ活動・自主活動説明・紹介
- 14:40-14:45 参加青年によるスピーチ①
- 14:55-15:05 パフォーマンス(和太鼓)
- 15:05-16:00 船内生活の紹介
- 16:00-16:15 参加青年によるスピーチ②
- 16:15-16:30 Q&A、閉会・挨拶



Ship-mates 育成プロジェクト「世界船のつなぐ未来」

第15回「世界青年の船」事業参加青年
長田 尚子

平成17年3月15日、愛知県の私立光ヶ丘女子高校で「世界青年の船」事業（世界船）をPRする機会に恵まれました。第15回「世界青年の船」（SWY15）で立ち上げた「Tsunagu-friend-ship」を中心として、イエメン、パレーンの既参加青年を加えた9名が講演を行いました。演題は「世界船のつなぐ未来」。世界船の事業紹介を通して国際交流について考えようという企画です。しかし、一口に世界船といっても、限られた時間で語り尽くせるものではありません。今回は「世界船とはどのようなものか」、「事業に参加して何が変わったか」の2点に絞って話しました。

前半は、メンバーの簡単な自己紹介から始まり、イエメン、パレーンの参加青年は、民族衣装で登場しました。

その後、クイズを交えたパワーポイントでの事業説明に続き、SWY15を総括したビデオを上映しました。懐かしい映像にこちらも胸が熱くなりました。会場には600名程の生徒がいましたが、彼女たちも目を輝かせて説明に聴き入っていました。

後半は、事前に集計していた「事業に参加して個人がどう変わったか」というアンケート結果を公表しました。また、事前に東京で録画した既参加青年へのインタビュービデオも上映しました。米国での同時多発テロ当日をそれぞれアメリカ側、イスラム側で迎えた人たちの談話、世界船に参加した後、

自分の研究テーマを「核」から「環境」へ変えた研究者の話などが盛り込まれていました。最後の質疑応答や懇親会も和やか、かつ活発な雰囲気です。終わることができました。会場に置いた配布資料も瞬く間になくなりました。

講演会終了後、寄せられた感想を読んで予想をはるかに上回る熱気を感じました。「国際交流が身近に感じられた」「い

つか自分も船に乗りたい」という感想が多く見られました。今後は、彼女たちの興味を持続させる方法を考えていきたいと思っています。

今回の講演で、多くの生徒が世界船への憧れを抱くようになりました。主催者側も、気心の知れたメンバーとの活動を通じ、世界船の魅力を再認識することができました。このような活動によって、既参加青年や未来の参

加青年ともつながっていくことができれば、これほどすてきなことはありません。



非日常の中の日常—津波後のスリランカ

第26回「東南アジア青年の船」事業参加青年
 第29回・第30回「東南アジア青年の船」事業管理部
 野副 美緒



明るい表情で食事をするキャンプの子どもたち

津波後の緊急援助の仕事をしていると言うと、「すごいね」と言われる。自戒を込めて、こういうセンセーショナルな災害地で仕事をする外部の人間の陥りやすい罠は、自分がえらいような気がしてしまう錯覚だ。

国連世界食糧計画(WFP)スリランカに来て、早一年半。外務省が若手を国際機関に送る制度JPO(Junior Professional Officer)として、津波後は地域事務所のオペレーションに関わってきた。最初の一年間は首都のオフィスで給食事業の計画や栄養調査に携わった。もともと「復興支援」「社会開発」の計画立案がしたくてアフリカ希望だったが、外務省人事の「君は、アフリカの大きなオフィスで働くよりも、小さなオフィスでいろんな仕事をしたほうが伸びる」という言葉でスリランカへ。

◆野副美緒さんのプロフィール◆

- 1998年 中央大学総合政策学部卒業
弁護士事務所・緊急援助NGOを経て
- 2001年 ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)発展途上国における社会政策修士
- 2003年12月 国連世界食糧計画スリランカ事務所

野副さんの連絡先 e-mail: miomiomio@hotmail.com
 URL: http://mio.moo.jp

国連世界食糧計画(WFP)スリランカに来て、早一年半。外務省が若手を国際機関に送る制度JPO(Junior Professional Officer)として、津波後は地域事務所のオペレーションに関わってきた。最初の一年間は首都のオフィスで給食事業の計画や栄養調査に携わった。もともと「復興支援」「社会開発」の計画立案がしたくてアフリカ希望だったが、外務省人事の「君は、アフリカの大きなオフィスで働くよりも、小さなオフィスでいろんな仕事をしたほうが伸びる」という言葉でスリランカへ。

スリランカのWFPは50人弱のオフィスだったのが、津波が起きて以来、200人規模になった。プロとはいえ、経験的に新人の私が国レベルでやれることは少ない。津波3日後に上司に掛け合い、1月の中旬から被害者の数が地域単位では一番多い東部アンバラ事務所の設置をし、4月下旬からは3つの地域を担当するゴール事務所のプログラム責任者になった。

務所のプログラム責任者になった。

183,000人(アンバラ)、273,000人(ゴール)の食糧がきちんと受益者に届いているかモニタリングするのが主な仕事。ローカルの職員とともに土日返上でカウンターパートである政府機関や食糧配布の現場、避難民キャンプを回った。

緊急事態特需下では、金も人も物資も一気に流れ込んできて、必要不可欠な調整が後手にまわることが多い。モノはあるのに、必要な人に届かないもどかしさはあるが、後ろ盾のない正義や理想論は現場では邪魔なだけだ。必要なのは、イライラせず何事も受け止める度量と笑顔と、なぜここに私がいるのか?の原点である。そしてローカルの智恵と知識、人間としての常識とチームワークである。

疲れているときに、理不尽な現場に直面すると「こんなに苦労しているのに」という気になることもある。しかし、これが仕事なのだ。日本のサラリーマンが満員電車で揺られ、頭の固い上司のもとでノルマに追われて仕事をするがごとく、私は炎天下で、非効率や納得のいかないことを1つ1つ直していく。地味で腹が立つ小さな作業の連続だ。ただ、単純に笑顔で温かいご飯を食べる子供たちがいたり、WFPの食糧を自転車に積んだおじいさんに「ありがとう」と言われたりして、自分たちの仕事が役に立っているのだという小さな満足感を感じる場面に度々会えるのは嬉しい。

世界各国から来たプロと地元の温かい人たちが、いろんな人と一緒によりよいものを作り上げていく「東南アジア青年の船」の空気にちょっと似ていなくもない、この創造的でダイナミックな環境と仕事がとても気に入っている。



食糧を分配する筆者(中央)

スマトラ沖地震復興募金報告

マクロコズムvol.63(3月号)でお知らせした「スマトラ島沖地震による災害復興募金」に、多くの方々から御協力いただきました。募金の集計結果を報告します。(6月30日現在)被災国での復興支援のために、タイの「東南アジア青年の船」事後活動組

織 (ASSEAY: Association of the Ship for Southeast Asian Youth of Thailand) と、スリランカの「世界青年の船」事後活動組織 (SWYAA Sri Lanka: The Ship for World Youth Alumni Association Sri Lanka) へUS\$3,000ずつ渡されました。

第2次募金は、IYEO全国大会(11月19日-20日)まで行われますので、引き続き御協力をお願いします。

組織名	寄付額	
第17回「世界青年の船」事業参加者	米ドル	2,763ドル
	オーストラリア	220.00オーストラリアドル
	ニュージーランド	125.00ニュージーランドドル
	日本円	26万5,628円
アメリカ合衆国「世界青年の船」事後活動組織 (SWYAA-USA)		355ドル
メキシコ合衆国「世界青年の船」事後活動組織 (SWYAA-MEXICO)		1,080ドル
日本青年国際交流機構 (IYEO)		49万4,474円



▲津波の被害にあったタイ南部から来た女の子 (タイFHCPにて)

～IYEO組織の充実と活動の活性化を図るための 財政基盤の確立を目指して (寄付金のお願い)～

日本青年国際交流機構 (IYEO) が設立20周年を迎える本年を契機に、組織の充実と活動のより一層の活性化を図るための財政基盤の確立を目指して、会員に寄付の呼びかけを行っています。すでに会員の皆様には、お願いの文書と資料をお届けしていますが、改めて御理解御協力のほどお願いします。御協力いただいた寄付金は、IYEO設立20周年記念事業、国際的ネッ

トワークの確立のための活動や都道府県IYEOの組織充実等のために活用させていただきます。

また、寄付金の使用分野について御指定がありましたら、振込用紙の通信欄に記載くださるようお願いいたします。

なお、詳細についてのお問い合わせは、日本青年国際交流機構副会長 大橋玲子 (E-mail: ohashir@iyeo.or.jp) へお願いします。

日本青年国際交流機構設立20周年記念事業について

プロジェクト名	内 容	進行状況
グローバル・フォト・コンテスト	「食のある風景」をテーマに写真コンテストを開催し、優秀作品をラミネート加工、ケースに入れて貸出し可能なキットを作成。世界各地で写真展を開催。	写真パネルの作成終了。写真展の開催が、各地で始まっています。
冊子「ターニングポイント」	特徴ある活動を行っている会員を紹介する「マクロコズム」の同企画ページに加筆したものを記念誌として発行する。	H16.11～H18.3 (マクロコズム掲載実施中) H17.11 (第1巻発行を目指して作成中)
IYEO:CAFÉ	各都道府県組織において実施する総会を「IYEO:CAFÉ」として、更なる会員間の交流の場を提供する。	H17.4～ (各県総会開催日に併せて実施)
スタディツアー	海外へのスタディツアーを実施し、国際交流の意義を再確認する。	H17.11月 韓国へのスタディツアーを計画中
IYEO新入会員向けリーフレット作成	組織に関する基本情報、活動事例、その他関連資料を網羅したリーフレットを作成し、新入会員の活動参加に役立つ情報源を目指す。	H17.9 (配布開始)
広報活動	組織整備の一環として、各都道府県組織における広報活動を例示し、組織及び諸活動の更なる周知を図る。	各都道府県IYEOで実施中

「日本・中国青年親善交流」事業での経験を活かして

平成16年度「日本・中国青年親善交流」事業（第26団）渉外団員

壬生佐智子



SO世界大会：今でも交流が続いているスピードスケートのコーチ2人と（筆者中央）

内閣府青年国際交流事業の総括でもある今年2月の報告会の準備が本格的になった頃、本事業で得た国際交流の経験と中国語を活かして何かできることはないかと考えました。その結果、スペシャルオリンピックス(以下SO)世界大会に参加し、DAL(Delegation Assistant Liaison)という選手団付き通訳及びサポート係として、香港スピードスケートチームと8日間行動を共にしました。

担当したチームのアスリートもコーチも広東語を話し、マンドリン中国語を話す私とは言葉が通じず、意思の疎通には互いに労力を要しました。今まで外国の方との意志疎通を言葉に頼ってきた私はこの状況にかなり不安を覚えました。中国派遣時に何人もの団員が、言葉が通じなくても楽しく交流していたことを思い出し、最低限必要な広東語を少しずつ覚え、奮闘しました。

その甲斐あってか、言葉の通じない私を遠目で見ていたアスリートたちが2日目には積極的に話しかけてくるようになり、残りの日程は業務の多忙さを感じないほど楽しくあっという間に過ぎてしまいました。たった8日間でしたが、言葉だけ

では成し得ない交流の原点に立ちかえられた貴重な体験でした。

大会後は、SO東京の「ダンスプログラム」と運営組織の「ボランティア部会」に参加するようになりました。SOでは日常的に、スポーツ以外にも合唱・ダンス等の活動を行っています。ダンスプログラムでは、「ドレミの歌」や「世界に一つだけの花」等皆が知っている曲に合わせてアスリートとペアになって踊るなど、スポーツが苦手な人でも充分参加できます。

SO東京には、「ボランティア部会」の他、「広報」や「情報管理」、「地域振興」等の運営部会があり、ボランティアが自分の得意分野を活かし活躍しています。ボランティアというと「大変」というイメージを持つ人が多いようですが、ここではボランティアが様々な所で自分にあった役割を見つけ、楽しみながら活動しています。私も中国派遣の経験を活かし、SOでのボランティア経験を重ね、できることを少しずつ探していきたいと思っています。



▲SO東京での活動：陸上
(SO東京広報部会提供)

▲SO東京での活動：バスケット
(SO東京広報部会提供)

◆お知らせ◆

10月15日(土)に東京杉並区上井草スポーツセンターで「ボランティア体験プログラム」が行われます。参加したいけどきっかけがなくてという方、少しでも興味をお持ちの方、この機会に参加しませんか？詳細はSO東京HPをご覧ください。http://www.son-tokyo.gr.jp

平成17年度日本青年国際交流機構都道府県役員研修

日本青年国際交流機構の年間行事である都道府県役員研修が東京で行われました。30都道府県より42名の参加者が集まり、IYEO本部役員16名及びIYEO運営委員8名による1泊2日の研修を行いました。

◆スケジュール◆

6月18日(土) 会場：BumB東京スポーツ文化館

13:00～14:00 開会式、オリエンテーション、アイスプレ
ーキング

14:10～18:00 分科会1

19:15～19:45 全体会 (IYEOの社会的存在意義、活動の目
標、内閣府・(財)青少年国際交流推進セン
ターとの関係についての理解を深める)

20:30～ 懇談会 (晴海グランドホテルにて)



▶ アイスプレ
ーキング

6月19日(日) 会場：晴海グランドホテル

09:00～11:30 分科会2

12:30～15:00 全体総括会

1. 在住ブロック別意見交換 (参加者が各自の経験と他コース
の内容を共有し、今回学んだことをそれぞれの環境でどの
ように生かすかについて意見交換する)

2. 分科会担当講師からの総括

3. 評価会 (評価シートを使ったふりかえり/この研修から得
たものを基に今後の活動について話し合う)

15:10～15:30 閉会式



▶ 分科会の様
子

◆分科会コース紹介◆

Aコース「プログラムの組み立て方」

担当：焼野嘉津人監査役 アシスタント：田中純子、川嶋伸明
国際交流プログラムや報告会、説明会などプログラムの組
み立て方の工夫やより良いプログラム作りについて

Bコース「組織活性化のノウハウ」

担当：椿景子監査役、中野智昭副会長 アシスタント：西田幸平
ファシリテーションや組織内のコミュニケーションの方法等、
組織の活性化に必要な知識について

Cコース「実務面スキルアップ」

担当：酒井昇事務局長 アシスタント：岡本大輔
広報活動をキーワードとして、組織活動の実務を取り扱う
ための注意点や工夫について

◆参加者からのコメント 河村健太郎 岐阜県IYEO副会長◆

6月18、19日、東京で開催されたIYEO都道府県役員研修
に参加しました。研修内容は「いかに各都道府県での活動を
深め、広げていくか」でした。私が参加したのはCコースで、
伝えたい情報をうまく、早く伝えるための勉強でした。この
場で私は方法を学んだわけですが、それよりももっと大きな
成果は、昔の仲間と再会し、旧交を温め、新しく知り合った
仲間とお互いを知るきっかけを与えてもらったことです。閉
鎖的になりがちな各都道府県でのIYEO活動ですが、こうした
仲間から刺激を受けることにより、さらにながらもうという
思いが湧いてくるきっかけになりました。まだまだその機会
は十分にあります。岐阜県IYEOをステージに、組織の基盤作
りから、様々な企画をしていきたいと思っています！

Tyshin Yazik (英訳：Tongue of Mother-in-law)

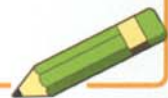
国際青年育成交流事業の地方プログラムで、ミャンマー連邦（10名）、ノルウェー王国（8名）、カザフスタン共和国（5名）の青年が7月18日（月）～25日（月）の8日間、鳥取県を訪問しました。7月21日には鳥取市国際交流プラザで地元青年との料理交流会が開かれ、各国の料理をみんなで作って、親交を深めました。日本でも手に入る材料でできるおいしいカザフスタンの伝統料理のレシピをご紹介します。

■ 材 料 <材料：5人分>

- ・トマト/3個 ・ナス/5本 ・にんにく/1個
- ・マヨネーズ/適量 ・ひまわり油/適量

■ 作り方 ■

- ①トマトとナスを輪切りにする。
- ②ナスの両面に小麦粉をまぶし、ひまわり油で揚げる。
- ③にんにくをすりつぶし、マヨネーズに混ぜる。
- ④ナスがさめたら、片面ににんにくマヨネーズを塗って、その上に輪切りのトマトをのせる。
- ⑤最後にパセリを飾ってできあがり。



▲Tongue of Mother-in-law



◀「ラグマン」という料理に使う
パスタを作るカザフスタン青年



▲肉と野菜がたっぷり入った
パスタ「ラグマン」

コラム

カザフスタンの料理は、遊牧中でも長期間保存でき、かつ、くりかえし食べても飽きないような肉と乳からできた半加工品が多い。カザフスタンの人はよく肉を食べるため、「カザフ人は世界で2番目に肉を食べる。1番よく食べるのはオオカミ」という冗談があるほど。ロシア料理の影響も受け、野菜を多用するようになっている。

(参考： <http://asiandishes.hp.infoseek.co.jp/tokoro/tokazakhstan.html>)

中国同窓会主催「中国語講座」開催

平成12年「日本・中国青年親善交流」事業(第22団)

山口 直彦

内閣府「日本・中国青年親善交流」事業既参加青年で構成される中国同窓会企画(コーディネーター:佐藤敬子さん(第16団、20団、25団)参加)により、2回シリーズの「中国語講座」が開催されました。延べ25人ほどの参加者が、おいしい中国菓子と中国茶を楽しみながら、講師作成のオリジナルテキストを使用して、中国語の学習に取り組みました。

【第1回】平成17年5月14日(土)

14時~15時半

講師:第26団渉外団員

壬生佐智子さん

テーマ:「勉強すればするほど
楽しくなる!中国語」中国語講座
へようこそ!

5月28日(土)

主催:中国同窓会

【第2回】平成17年5月28日(土) 14時~15時半

講師:第25団渉外団員 吉田綾さん

テーマ:「今すぐ使える中国語」

場所:(財)青少年国際交流推進センター 会議室

◆講座のねらい

- ・効果的な形容詞の使い方や、日中の言葉の特徴を知る。
- ・挨拶・自己紹介・「~をしたい」など旅先で役立つ表現を学ぶ。
- ・自己防衛のために必要な表現を身につける。
- ・発音の練習をする。



◆講師のコメント

自分自身が中国語の知識がほぼゼロの状態での留学のため、他の留学生に比べ語彙が決定的に少ない状況でした。少ない語彙の中で、どのように表現力をアップさせるか悩んだ経験から、このテーマを設定しました。また、各民族の重要文化の一つである「言葉」にはそれぞれ「特徴」がありますので、プラスアルファの興味と理解を深めるきっかけになればと思い、両国の言葉の特徴を取り上げました。(壬生さん)

◆参加者の声

- ・細かい文法よりも、実際によく使われる表現を学べました。
- ・言い回しを学びながら、気づかされたことが多々ありました。
- ・中国人の考え方がわかっておもしろかった。
- ・ご自身の中国での体験を語ってくださったのがよかった。
- ・今後もみんなで学習を続けていく機会があるといいですね。

■お知らせ■

1泊2日の同窓会が25団幹事で9月24日(土)~25日(日)に東京で開催されます。詳細は中国派遣団同窓会のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.iyeo.or.jp/china/ob/>




真剣に学ぶ受講者

青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第21回全国大会
第12回青少年国際交流全国大会フォーラム
宮城大会

11月の全国大会に向けて、本格的準備に入った宮城IYEO。全国からたくさんの方たちに集まってもらいたいとプログラム作りに励んでいます。宮城を見て、感じて、体験して、そして人の輪、IYEOの輪を更に大きくしていただけたら…と準備を進めています!!

あした
味わい、語らい、飛び出せ未来へ
～出会えて良かったっちゃ、ここ宮城で～

1. 主催	内閣府政策統括官(共生社会政策担当) (財)青少年国際交流推進センター 日本青年国際交流機構 宮城青年国際交流機構	
2. 主管	日本青年国際交流機構第21回全国大会宮城実行委員会	
3. 期日	平成17年11月19日(土)～20日(日)	
4. 会場	ホテル松島大観荘 〒981-0213 宮城県宮城郡松島町松島字犬田10-76 TEL 022-354-2161	
5. 参加費	大人(中学生以上)/1名…16,000円(非宿泊8,000円) 小学生以下/1名…11,000円(非宿泊5,500円) フォーラム&分科会だけの参加者/1名…1,000円	
6. 参加申込み方法	同封の振込用紙を切り取り、必要事項を記入の上、参加費のみお振込みください。	
7. 参加申込み先	郵便振替口座番号: 02250-7-67169 (手数料当方負担) 口座名称: 日本青年国際交流機構第21回全国大会実行委員会 銀行振り込み口座: 仙台銀行 国分町支店 203(店番号) 3745411(手数料皆様負担) 口座名称: 宮城青年国際交流機構 会長 及川留太郎	
【申込み締切日】11月7日(月) 振込み日有効		
8. 問合せ先	宮城青年国際交流機構 事務局 細貝和子・伊勢みゆき 〒980-0014 仙台市青葉区本町2丁目8-15 仙台市民活動サポートセンター内 レターケース#55 電話 090-6250-4730(細貝)/090-7079-8673(伊勢) Fax 022-268-4042(宮城IYEO宛と明記のこと) E-mail miyagiyeo@hotmail.com http://www.iyeo.or.jp/miyagi/	

第1日目・11月19日(土)

- 12:30～13:30 受付
13:30～14:00 開会式
14:00～15:30 基調講演「世界は食ing(ショッキング)
一人を良くする食べもののはなし」
講師 料理研究家 熊井かつ子氏
16:00～17:30 テーマ別分科会
17:30～18:15 チェックイン及び休憩
18:15～18:30 写真撮影
18:30～20:30 懇親会

第2日目・11月20日(日)

- ～ 9:00 朝食及びチェックアウト
9:00～10:00 内閣府事業参加報告
10:00～10:30 閉会式
10:30 解散
- ※ 地域理解研修(オプション)
- ①「松島湾クルージングと殻付きカキ詰め放題」
 - ②「石巻巡り、支倉常長ゆかりの地を訪ねて」
 - ③「湯ったり秋保温泉とドキドキこけしの絵付け」

基調講演 講師 料理研究家 熊井かつ子氏

ソプラノで奏でる会話は、誰もが魅了されます。それは芸術？国際交流？本当の意味のお料理？「熊井クッキングアカデミー」主宰が贈る素敵な時間の始まりです。もっと素敵なあなたになるかも…。

分科会内容

①『アフガニスタンの今—ペシャワール会における活動からの報告—』

アメリカのアフガン攻撃の後、現地入り。農業や用水路工事などに従事したNGOペシャワール会での活動の3年間。橋本康範氏（第13回「世界青年の船」・宮城県在住）が活動を通して見えてきたアフガニスタンの様子を熱く語ります。写真展同時開催。

②『パラツィーノ伯爵・ドン・フィリッポ・フランシスコ 支倉六衛門』（支倉常長の世界への挑戦）

約400年前、伊達政宗の命を受けた支倉常長は、サンファン・パウティスタ号でイタリアに渡り、ローマ法王と謁見した日本最初の国際人。伊達衆の思い描いた夢と歩み。元仙台市博物館長の浜田直嗣氏が、ゆかりの地・宮城で国際交流の原点を探ります。

③『集え、中堅若手！IYEO事後活動自慢大会』

事後活動の醍醐味はアイデアと行動。これはいい！というアイデアを出し合い、語り合しましょう。あなたの頭の柔軟さが求められます。1+1を3や5にするには…「シナジー効果」抜群！！

④『違いっておもしろい！？留学生と^{ガクシユウ}練習！』

「東南アジア青年の船」既参加青年である東北大学留学生を中心とした集い。「話す、遊ぶ、歌って踊る」をテーマに文化の違いを楽しく学びませんか？

⑤『あなたも^{ヒメ}酒ムリエ☆宮城の銘酒を楽しもう』

米どころ宮城と言えば…やっぱり日本酒。酒蔵だから話せる「日本酒の秘話」もまた聴き酒。銘酒「一の蔵」によ

る利き酒タイムの始まりです。

⑥『レッツ ダンス、雀！—仙台伝統芸能雀踊り』

「雀」って？結びつくのは「お米」。伊達政宗時代に豊作を祝って始まったと云われ、今に伝承される踊り。5月の青葉祭りには、子供から高齢者まで扇子を両手に表現豊かに楽しく繰り広げられます。あなたも！

見逃せない！宮城大会限定品

① IYEO設立20周年記念日本酒

待ってました。及川会長自家製のお米による日本酒が完成！宮城大会限定100本のみのお頒布です。

四合瓶1本1,900円。事前申込＆お問い合わせは宮城IYEO事務局まで。

② 北海道・東北ブロック福袋

仙台発生の初売り。初売りといえば福袋。福袋といえば安価。北海道・東北ブロックIYEO会員「お助めの品」が詰まった福袋です。売上は全額、「スマトラ沖地震災害義援金」として寄付されます。

地域理解研修（オプション）のご案内

①『松島湾クルージングと殻付きカキ詰め放題』

期間限定そしてホテル大観荘限定の超お得な「日本三景松島湾クルージング」。寒風沢島に立ち寄り、地元で獲れた新鮮な焼きガキの試食あり、詰め放題（時価4,000円がナント1,000円！）あり。到着先は塩釜、生まぐろ水揚げ日本一のお寿司はいかが？

②『石巻巡り、支倉常長ゆかりの地を訪ねて』

支倉常長就航の地、月の浦。日本で最後の木造での復元船が係留する「サンファンパウティスタ館」。漫画の町、石巻「石の森章太郎漫画館」を訪ねます。

③『湯ったり秋保温泉とドキドキこけしの絵付け』

仙台の奥座敷、秋保でオリジナルこけしを作ります。その後は温泉でのんびりと身も心も癒されましょう。

我らが仲間が「全日本テレビ番組制作社連盟(ATP)総務大臣賞」受賞

第26回「東南アジア青年の船」事業参加青年

清水 御冬

ビデオを回したのは6年前に「東南アジア青年の船」(東ア船)でプレスをした時が初めてでした。「こりゃおもしろい」とそのまま映像の世界に引き込まれ、船を降りて半年後、番組制作会社に入社、ドキュメンタリー番組をつくる仕事を始めました。以前はまさか自分がこんな仕事をするとは思っていませんでした。

現在は、ほとんど自分で撮影して編集、ナレーションを書いて放送、という感じで月に1本ぐらいのペースでフジテレビの報道番組をメインに制作しています。

去年の夏からは第22回東ア船の既参加青年である菱田慶文さんを「下町の熱血先生」というタイトルで取材し、5回にわたって放送しました。日々、勉強になることばかりです。

今回、全日本テレビ番組制作社連盟(ATP)総務大臣賞をい

ただいた番組は、初めてつくった1時間番組。フジテレビの「元暴走族の熱血子直し」というテーマで、今も取材は継続しています。

人を描くことの難しさに日々、直面しています。しかし、その苦しみから得るものはとても大きい。これからも世界を発見し、人間を見つめる旅を続けていきたいと思います。面白い人がいる、面白い話がある、問題提起をしたいなど、ぜひ情報をお寄せ下さい。(TEL: 090-1837-5654 / e-mail: mifuyurie@ezweb.ne.jp)



今月号の表紙

グローバル・フォト・コンテスト

日本青年国際交流機構
(IYEO) 会長賞受賞作品
「タリの実を売る少年達」
岩崎 圭 (SWY11)



編集後記

マクロコズム 7月号のお知らせページで紹介した絵本「ほんのすこしの勇気から」は、たいへん好評で、緒方貞子さんからお褒めのことばをいただいたり、韓国語での出版のお話があったりしたそうです。取材を通して知り合った方から、その後の活動について連絡をいただくことがうれしくもあり、楽しみです。(ふ)

MACROCOSM 9月号 Vol.66

2005年9月1日発行(隔月発行)

編集 マクロコズム編集委員会

発行 財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013 東京都中央区日本橋

人形町2-35-14 東京海苔会館6階

TEL 03-3249-0767 FAX 03-3639-2436

e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp

URL: <http://www.centerye.org>

(CENTERYE)

<http://www.iyeo.or.jp> (IYEO)

編集協力 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)

日本青年国際交流機構 (IYEO)

定価 198円(本体189円)

印刷所 柏木印刷株式会社

TEL:03-5395-3954 FAX:03-5395-8213

since
1884
Pioneer Of
Cruise



USPH→米国公衆衛生局は米国に入港する客船に対して毎年検査打ちで衛生検査を実施しています。にっぽん丸は、2000年から3回連続して100点満点の99点を取ると、日本船では最高の評価を5年連続で受けています。



冒険する生活
にっぽん丸



地声がでかくなつて、
内緒話しができないんですわ。

にっぽん丸操機手 佃 高広

重い鉄扉を開けると、鼓膜を震わせる騒音と共に強烈な熱風が飛び出してきた。「熱いでしょう、それにうるさい。まるでサウナの中で道路工事してるようなもんで…。にっぽん丸の心臓部であるエンジンルーム、ここが操機手・佃の職場だ。「もう慣れましたけど。最初の頃は仕事もわからない上にこの音でしょう、先輩が何言ってるんだか聞き取れなくて、ずいぶん叱られましたよ。でも、自然と分かるようになってくるんですわ。人間ってスゴイよね、どんな環境にも慣れちゃう」。そんな佃であっても、室温が50度近くにまで達するこの熱さにはいまだに閉口するという。「熱さはね、どうにもならない。何度つなぎを着替えてもすぐに塩が付いてくる。でも痩せないんだよねえ…。」とこの過酷な状況をも笑いとばす佃。「そりゃ大変だけど、お客さまが安心して船旅を楽しめるのも、毎日ここでボクらが熱さや騒音と戦いながらエンジンを守ってるからだし、それに耐えてることがボクらの誇りなわけで…。」と言ってから「なんちゃって」といっておどけた佃。その笑い声は心地よく耳に響き、灼熱のエンジンルームの中に爽やかな余韻を残した。

もてなしにも、品質があります。にっぽん丸の船旅



<p>〈三連休利用〉土佐の高知クルーズ 名古屋発着</p> <p>名古屋→高知→名古屋 2005年9月23日(金・祝)～9月25日(日) 82,000円</p>	<p>瀬戸内海芸予諸島と土佐清水クルーズ</p> <p>横浜→瀬戸内海・大三島沖→土佐清水→横浜 2005年9月26日(月)～9月30日(金) 170,000円</p>	<p>伊勢鳥羽クルーズ</p> <p>横浜→鳥羽→横浜 2005年10月2日(日)～10月4日(火) 82,000円</p>
<p>台湾一周クルーズ</p> <p>横浜→鹿児島→基隆→澎湖諸島→花蓮→石垣→横浜 2005年10月4日(火)～10月14日(金) 324,000円</p>	<p>プラチナ エンターテイメントクルーズ 神戸発着</p> <p>神戸→(瀬戸内海)→長崎→(錦江湾)→神戸 2005年10月17日(月)～10月20日(木) 168,000円</p>	<p>2006年世界一周クルーズ</p> <p>横浜・神戸発着(各101日間)19ヶ国24港 2006年4月6日(木)～7月16日(日) 2,900,000円</p>

そのほかのクルーズもご用意しております。表示の代金はステートルームC1室を2名でご利用の場合の大人お一人様・国内クルーズは消費税込の旅行代金です。*各種のコースがございます。**熟年割引代金です。

商船三井客船 〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三井ビル5F MOPASは商船三井客船の登録です。 お問い合わせは、各クルーズ取扱旅行会社またはMOPASクルーズデスクへ。 クルーズデスクフリーダイヤル 0120-791-211 <http://www.mopas.co.jp>



旅も楽しめる合宿にしたい。



急に1週間の全国出張になった。



家族水入らずで楽しめるプランを。

ひとりひとりに、満点旅行。



女だって大手を振ってひとり旅したい。

ONE to ONE



思い出に残る卒業旅行にしたい。



修学旅行は自分たちで決めたい。



結婚式から新婚旅行までオリジナルで。



北から南まで温泉三昧したい。

商品力、サービス力、情報力、3つのパワーで、あなたの旅をさらに快適に。

旅にはさまざまな目的とカタチがあります。どんな旅でも、東急観光はすべてのお客様から満足され、喜んでいただきたいと願っています。そのために、オリジナル旅行や団体旅行など、ニーズに合わせた商品を多彩にご用意。またIT活用による最新情報の入手から24時間予約まで、リアルタイムな体制でお応えします。そして何よりも、旅の楽しさを熟知した私たちのひとりひとりが、お客様の旅を親身になって考え、最良のサービスをご提供します。

東急観光

国土交通大臣登録旅行業第38号
日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号
<http://www.tokyukanko.com>
<http://tour.tokyu.com>